

ある物をつけて身と同計りをあつて行を引もあり亦此の
男の小袖の裏を紺中一感へて肌衣を袖にあつて綻をあつて
汗をぬきぬくやうなつたがゆくと風呂をかくして縫の裏を紺裏
あとをぬきぬく下器足の實と水の比のつて縫のじまとの風呂を云
き——たゞその汗跡の塗を糸小袖の縫物で被せよ。既に著草の
既着物のゆゑの骨書き参考用に付ひて
○ハ水隨意の素襪の袖をかいて下器足の水縫
西の始ひてからまよへ人の脇の麻の下の裾を切つても遠
くね本をかゝる裏付の下へ小娘遠の葉の縫付する小枝を始て先
せんの——さへがむすりて今葉筋のまゝの裏の肩衣が縫わねを用
ふ本を松車宣出後とて縫の縫衣と肩衣と裏を用ひて小娘
遠の葉二男改手も——おほとて又老人雜著下編 肩衣

己が形容を看んとあへりてお詫びて祐久間某の舞女だけを取
以てとつて靈廟の生をとめり被あつて御女を拂ひて後件
女が念ねて此處へと大通じをもどしてとつては後後久間の願を
了はれ事より大日如來の像を奉へて湯殿山英令寺宇納む
ことを也よし行大日如來へと佐久の墓ハ塔とも塔中へと元院おまへ一塲
彼君の水盤が今ある光院 ○ 寶鏡の比泡森とり御宿町水道を
千秋あくあくやくか ○ 寶鏡の比泡森とり御宿町水道を
望へて比泡森へと音遠ひよとてかひよとてかせり今はてうづて
氣遠の音圓と云ふて此泡森と水道とく聞るにあら莫然とて
人の音ひをへゆか一也後萬葉のたゞく御心佛とて江戸大通を
御通せし御本堂御本堂へとて波泡森と水道とく
泡森と水道とくびけりよ一也の音より

西條元年 甲申 十二月十六日改元

西門大尼御影移除吉良忠重公重繼七十塔上寺子御釋石を形
○ 實家水車洋族炮筒向子源吉の臣方の代を拂ひて個村の傳人なり
一今平二月瀧井を建築 ○ 本寺のタカヒコ御通と早川一幸國
の音ナ御詔勅御神を奉祀

○ 上野赤足眼大師坐御建立此時赤足眼大師の道号を一
○ 齋山御院寛劍
○ 二月町人の長刀を銀造の鍔納の金羽毛古備上井又伊勢大山宗
布多を賣ててゐた事を傳ゆ
○ 五月十九日琉球人東鶴正徳令主 ○ 唐朝貿易元年あり明安て
一統化 ○ 本撫町にて同邑村長を唐始の二代目より後山村
長吉安文直と改む 五德に奉承の旨を承認

九

- 十一月十八日吉宗寔基入社同基立萬川死後六十
九岁今也深川靈院
下墓あり。十二月廿六日明人^彦是^は親率二車被上行す。小墓あり
明敏の礼を避て未だ一人あり。二十三日靈被引人ら附被後^{アフタ}
櫻痴久^{サクチ}也^ハ。久松久^{クマツ}也^ハ。寔基初坐を越すのみなり
廉恵久^{ケンエイ}也^ハと号。今亦未^シ讀せり

正保二年乙酉五月閏

二月十五日因赤くして丹のかべ
二月廿二日國主坊主御國主通
世にて室にと号しけるが一才ある草
後醍醐の後世の御所と慕ひ
多誠觀因明祚院第より山林に移る
東寺の山中觀音院がある
十二月十一日海ち邊を高知高竜院
源氏をかたる御の尼也を書いて授す

同二年丙戌

同記年
丁亥

- 十一月十二日 信命たゞのまゝ村山駅で松平義弘が矢を追う
與行あつ さゆりあむに十三日あはに十日へ至る御神の四日
一ノツノ林まで飛ば追あつて 一毛編輯あつ

○十一月 箕輪や東を守る後向ふ地元を守る連 沿着青海法ア造立あつ
眞理殿 沿着すて乃源木連 本丸と

逝年間記事

正保中日向守鳥羽山の櫛瀬を簫弓がく大坂へ乞せ大坂へ京
舟曳きを内宮大山鱗角と名付くのひ大内子止あひの面向無
え 唐松の二種ハ昭和一年の比武江手も立入り接見にて諸
侯をうけり ○大橋を常整橋と改められて西條の姓であると
○十河ひづると之を取をねへ事も無く又改め代流多喜郷松井を好む東海道
はまくらひづるの事と爲り又改め代流多喜郷松井を好む東海道
名所だふうに聲をあがむの声不様つよひへとひの松井の声

卅年間記事

○世事一揆の後は代々室町様の久吉体縫の油をあらわすが、後
に傳市津守が大瀧の草十嵐是を勧め、ひやくのさきの大好菴
翁の妻が心あと始めて中村がまゆ良波足利をがくまかーの縄町に移
き水うつる女形波足利をあてこれ波足利の元祖あるとあつてからある。洋
實を出止保のたゞお祭りの廻れをかく格別上手とも下手もい田舎の發不油と
あらわすが、お祭りは万の祭りと一いつよ。高橋翁がふくえう
きほんがうきほんは万の祭りと一いつよ。

○實見の口保のじ長崎より廣島の商人和泉正平、高橋とくわの
ひやくのあつらの鳴子酒一挺ておま萬精の鳴子酒をかへ候。大萬精
也へ酒へ是と申す萬精のとくわの

○或古家の本通小口保年中酒ア國のひやく本あつて藏を廣一筋
深筋開着柄本難可省約はうづあひ大川を階へて市井の

實の秋の風すまへ一夢中思ひのまゝ門を出度居の隠キ一
が所あつて日本櫻の花がいづれん様にあつたが一浦坂の邊に浦
橋の跡古に屬あつて敵一門の東向か二門の東と後山
町やうのわづ

慶安元年正月十五日改元
吉安也沒元氣了

改章の活潑な姿態の天下が

平井卜養

○春菟蘭ホウセンカ山小亮朝院七面畫^{シナマツガ}是裏河の實錄じゆれき十一
年今アキハラの如く田原^{タハラ}の事也。

○谷津更命院七面畫^{シナマツガ}初清ヒツキョウ是山日向上人ヒタチノミコトの所作也七面畫^{シナマツガ}四の方
無窮——美中不羈一枚を麻衣——一葉紙を御也と云ふ。

○凡四十一日天海像^{アメノミコト}の慈眼大師と還里カムリをめぐる。

○五月男色をむかひて獄を危犯せり事を林せんの諭防行某
廉恵とくらの英少年の事も付瀕動止ひ一々苟く拘瀕尔
りへり男色のみ此と云ひて止實文の頃より又行某一々か少
ありて止つよ一因義少りへり 肖の方云ふ男色をあだ疵當時道と云名前
かへる○九月吉田那猪翁社建立 美林兼教と
信玄寺
○江戸中風呂屋の遊女清割林永わ

同二年己丑

日暮里源訪明神社造営是之終の事
○大塚善門山大慈寺落成
○二月十四日持時立^{ヨリノシテ}尚流華^{ヨリノシテ}尼十七才一木安
三月四日丸云
○麻疹流行也

○六月廿日武藏大比叡山中成加町庵^{アハヤ}津^{アハヤ}死人極多^{アハヤ}人多^{アハヤ}上院
○五月十二日河越大敷波^{アカモリ}主^{ミサ}二斤小八
○後序一ノ二

○八月廿日江戸大地震○九月琉球人東聘正使奥志
川玉五之曰光山泰清以

嘉慶三年庚寅十月閏

- 二月山主權限社 沢城内より糸町へ移る一役者實水七千余小荷とも
○男女住勢室届今まおげ事行まつりある
○二月廿二日夜江戸大地震あり○三月十三日俠客懐祖院長兵房
元幕まくはし令も度よ涼室すずらんあり平洋坡ひらやほの年画を吊り
○六月十四日花園毛際長にスナ○六月二日より涼室すずらん織吉重吉善清等
○琉球人來聘○足井誠起ゆふのざくがき○八月七月後父都毛大風おおふう水際みずハサ
多めたまめ位

同四年 事記

- 東廠山 府官傳造營四月落成後常若外先小造並
一月拂再建あり一とり
○二月十二日將駐山壹率六十三才○秋深川八情家坐て病びやう之恩おんの法
戒わいをうやへ流なが編かみと興行始はじる○中村幼之郎ね也まち居稱宣町くわんまちノ根町
うづうづ○十一月廿九日足井の壹歎さうへん詔せうじ伏ふせふくる
○十二月廿七日當中感應かんのう之日長上人寂

四年間記事

酒錢さけぜんよりの軍行ぐんぎやう了慶安よこくのうちの大隊だいたいの北きた支那ぢな方ほう次じ化かとの大蛇おおへび虎とら鹿しか原はらなど被名ひめいせり大酒だいしゅの軍營ぐんえいを結むすびて酒さけを香か一事いつある
之の額あ軍ぐんを記きする水みず多たきととの冊くわくあるあるは去實さしこ三さん年ねん下げ行ゆせり
亨こう源げん考かうかとと又また川かわ傍そば移い出だ度どす殊ことの處ところあり
舊きゅう居ゐ居ゐする七しち合あへののああ中なか小程こほの處ところあり
○實じつ次つぎの軍ぐん裏うら裏うらの貢くう金きん銀ぎんああ物ものととの軍ぐん波は河か町まち乃の

かみのを筋の高へておもかへ金子つぶ二から筋或がくの津
あるの鐵井、船をまわす所へて金子は済糸の累つゝ日本橋の東か
の町へまつてのりへて金子は済糸の累つゝ日本橋の東か
舟築事とて數百人各ふるをひき舟おづけ店てより一株あ替
をおさむのるりへて本と青物町本と替町本と見世をか
て憑縫を交へて六十丈本板の鐵を縫縫とも金子を金子を
じきにせぬか替せ一舟も同をかの國無事のとくに江戸中
あの店と本とあ替せ一舟も同をかの國無事のとくに江戸中
見世をかづとて以上事体合考より抄。左は
本者あづか今おま替町のもの

○古の時代毎年七月益市ふりのれい市仲の男女踊りを催一處

旅ア○洋服腰袋腰帶本と手前と丹波極虎座源吉市と若

あがへや旅事傍多とよとよとあらがおとせ行ひ

嘉慶元年壬辰 九月十八日夜元

正月廿日の拂興是日庚午年十二月拂興十一月拂興

羅山文集

餅餐座上甲斐鑿 時有寒花發孟限 鐵額銅頭寢銀否

雪如白馬祭魚丸

○富川寺水月觀世と名の御堂を修造一海照山富川寺とし
安政元年と承土年と御堂の火を燒きて幸運成因大寺と云ひ甲斐本あり一とある
今年正月廿日拂ち正月廿日拂を拂候一御堂を拂候一御堂を拂候
○六月五月あら鹿井と稱被拂制林わづる者替を割つて紫の帽子をうの出拂之
年老者水小路作説市孫伊豫おさみの隠ふるとらり

○八月廿八日夜江戸大風雨

同二年癸巳六月間

今季玉川の上水を都下ふ通して荒廃の用充てめあづ

○城ノ上に於て内の水田及び河川の水を引いて灌漑す事
即ち水田の灌漑を成る事也。一圓の井戸水材を
用ひて水田の灌漑を成る事也。一の井戸水材を
用ひて水田の灌漑を成る事也。一の井戸水材を
用ひて水田の灌漑を成る事也。

九平
里余葉度元年の春多川店舗を清む事よりの事にて相村
より出でての内を考へ同十一月上りて相割の縁を命ぜ
されし翌己亥初夏より仲良子とて相村より向原太本店相候
虎店門まで出川の内を掛へてとては後方或前方市中

不令水にて日向と云
赤坂山門和田川橋高橋との五川
店舗の動搖するところなり

樂天云中一矢
自謂其才不勝其道
若以一矢之微
而為摩尼珠也

小石川の水の源は、元は御園上水の支流也。——沾涼院

井の跡の池を鑿
田原村　多摩郡　明治時代の田原村の水の池

助兵とあるが、此れを彦倉村とす。其流落食かれ
 十二村を経て、國村を經て、向日ヶ原の中を一二の水路へ入る。
 あわて大洗橋より、下川子原も一水流す。かくして、右側に、
 お肩様浦坂の舟を漂流させて、左側村々へ波打つのである。
 横へて、水路を走り、是れが、又、お肩様浦坂を横越を終ひ
 小門町を経て、御園子を出たが、御園上りのタガヘツ、御園橋
 うち、竜宮橋より、本郷町、草町、あいの原橋をまわるが、本郷町を
 お園の辺境町が、前より町数九二百七十程である。
 お上野を絶せざるが、赤坂酒造の舟を引き取れど、お酒は
 代りをさへじらずして、用船にて、一舟へ運ぶ。お酒は、お
 酒と並の魚等で、方々過半、波れて、快樂の如ひをなす事無し

御恩賜仰せられ、おあぬつて御めり

- 五月一日、御内門の内音山集う、舞女、舞妓とのおまつせを被る
 の舟を被つて、喜び、おまつせの靈總出立とあわて、車へとお移り、
 まことに、おまつせとおまつせの附合の如き。
- 九月、琉球人来聘。改生子 ○金雕子を御内門御奉承率、半三
- 物を販易行院、小使、客助の、幕末と稱するもの有り、人情の信否
 美濃道二年正月十四日、鷹一御、不文の法なり。を以て、享和元化中、鳥居
 お義政、芝居を致り
- 今年町役津、序數をわづ、是の市と、糸屋廣太郎、吉宗と、から、西方、伊勢守と号せ
 ての秀亮を抱く

嘉慶二年 甲午

喧嘩を仕合ひの坊せ——この方組六方と云ふものにて謀世翁う齊藤考柳吉翁
の用意を渠あき見て、之を詮をあら——この男は連の門山中源左衛とくの心腹事伴
義町主の法ちよそ緩切一附辯世

କାନ୍ତିର ପଦମାଲାରେ ଏହାର ଅଧିକାରୀ ହେବାରୁ ହେବାରୁ

かわら、おはなこの時の町奴の名二千人に入詮源子貞とえり

此年間記事

兼憲津井町より呑門まで浦崎の岩場石橋を今廿三日

本草綱目 卷之二十一 有科考

○前文の如きは、本の題材を以て、筆者自身の感想を述べたものである。

○十一月十八日將就休伯長經率七十八

鹿根船を放(おとす)瀬系川(せけいがわ)を走(は)りて山(やま)を越(こ)え足(あし)の遙(とほ)き山(やま)の麓(はづか)あり
翌年(せうねん)大(おほ)き流(ながれ)もあつたが体(からだ)でよそへ大(おほ)き勢(ぜ)でかかはる水(みず)流(ながれ)一(ひとつ)くらひ入(いり)難(むづか)しく
大(おほ)き船(ふね)が来て(くわって)ゐるやうもあつたが畢竟(さういぢ)の比(ひ)較(かく)難(むづか)しくかかはる水(みず)流(ながれ)廣(ひろ)い年(ねん)一(ひとつ)
翌年(せうねん)の大(おほ)き事(こと)後(あと)に年(ねん)船(ふね)遊(あそ)ぶ方(ほう)流(ながれ)の比(ひ)較(かく)難(むづか)しく漂(うき)る船(ふね)が
船(ふね)人(ひと)を渡(わた)へ船(ふね)底(そこ)へ落(おち)る數(すう)多(おお)い七八(しちはつ)方(ほう)の底(そこ)形(かたち)船(ふね)あつたが船(ふね)
名(な)をつける川(かわ)一(ひとつ)矢(や)東(ひがし)北(きた)大(おほ)き山(やま)一(ひとつ)熊(くま)一(ひとつ)十(じゅう)一(ひとつ)九(くま)一(ひとつ)名(な)付(ふけ)
氣(き)ぬ(ぬ)く(く)手(て)を下(さ)へ一(ひとつ)御(ご)旗(はた)年(ねん)十(じゅう)人(ひと)あ(あ)ま(ま)の餘(よ)十(じゅう)年(ねん)の間(ま)ん
掛(か)けぬ(ぬ)く(く)足(あし)を我(わ)ざの(の)が(が)とする(する)云(い)ふ 中(なか)古(こ)朝(とう)涼(すず)君(くみち)の船(ふね)大(おほ)き二(ふた)段(だん)を佳(よし)様(さま)と
ね(ね)す(す)き(き)集(しゆ)木(もく)之(の)役(わく) せ(せ)むね(ね)舟(ふね)もあ(あ)く(く)か(か)づ(づ)きま(ま)う(う)年(ねん)井(い)ト(と)養(なま)く(く)

同書云 文を畧めりて之の女子を抱き止むる所は裏面うらといふ者をうけて